

沖

2
2022

俳句雑誌【おき】



正座

能村 研三

百周年を迎えた「馬酔木」

昨年十月俳誌「馬酔木」は創刊百年を迎えた。同じ師系に連なるものとして同慶の至りである。

私は俳句を始めて五十年が過ぎたが、俳句の手ほどきを福永耕二先生に受けたこともあって、大学在学中に「馬酔木」に投句したことがある。初めて二句入選の成績をいただいた時の喜びは一入で、「二句の中から」という批評欄で大島民郎先生が「青林檎置いて卓布の騎士隠る」の句を評して下さった。その事がきっかけで第一句集の句集名を「騎士」としたらよいのではないかと登四郎から助言があった。

「馬酔木」の編集を福永先生が担当された頃であつたと思う。耕二先生からの命で「馬酔木」の記念号の外部執筆者の原稿を、荻窪の水原先生のお宅に伺ってお預かりしてくる役を仰せつかった。まだ俳句を始めたばかりのものにとつては、役目の重大さに身もふるえるような出来事であつた。おそらくは創刊五十周年記念の原稿で、水原先生のお宅の玄関先で秋櫻子先生から

蓮枯れて水のしがらみ解かれけり

朴冬芽木々に懈怠のなかりけり

遊び終ふ月蝕雉は蛤に

遠きほど輝く波や鷹の天

竹殺し箍結ふ樽や十二月

北窓塞ぐすなはち心塞ぐこと

霜の夜や正座の暮し忘れをり

初明り己が翼に力溜め

淑気満つ一閑張の文机に

鉄瓶の音を愉しむ三日かな

直接風呂敷包みの原稿と、編集部へ心遣いのお菓子をお預かりし、幕張の植松靖宅で待つ耕二先生と長崎から上京されていた朝倉和江さんのものに無事原稿をお届けすることができた。

昭和二十四年に能村登四郎と林翔が「馬酔木」の同人に推薦されている。その一年前の昭和二十三年には藤田湘子、林翔と共に巻頭を争い、藤田湘子と共に登四郎は「馬酔木」の新人賞を受賞した。

ぬばたまの愚詣さはに良寛忌

登四郎

この句は「馬酔木」昭和二十三年三月号で登四郎が巻頭をとつた句で、秋櫻子先生は選後評で良寛の書いた飴屋の旗が残っているという話まで引いて鑑賞してくれたそうだ。しかし、登四郎の兄弟子の波郷からは趣味に溺れた新人らしくない句と厳しい批判を受け初版の第一句集『咀嚼音』には収載されず、後に出された定本『咀嚼音』に収載された。

登四郎は投句時代を含めると「馬酔木」の在籍年数は四十五年にもおよび、百年の約半分にもあたり、「沖」在籍の三十六年をはるかに越えることになる。

能村 研三

冬帝の富士を娶りに降りて来る

義士の日の遅れて来たる宅急便

絵本より跳び出たやうに北狐

数へ日の木曜日なら空いてゐる

数へ日の三面鏡に三つの顔

無駄口をたたかぬ男海鼠噛む

鴨鍋の最中に喰らふ肘鉄砲

登四郎先生の句集『羽化』を読んで、平成十二年の元日に詠まれた句に目を止めた。先生はきつと起床してお風呂に入つて後に朝食をとるのが慣いだつたのであろう。その起床からお風呂までに詠まれた数句の中の七句を挙げてみよう。朝の最初にへ初明り浴び立血つ我や九十歳へ次にへ清らなる一月はわが生れ月へでへ初明りの中なる己れ礁かにゐてへ元旦の穏やかな日を誰も褒むへ新年のまづ仰ぐもの庭の松へへ賜りしこの一年をひしと抱くへへ初湯出てすこし身軽き立ち居かもへなどがある。

先生は一月五日生まれという。初めの三句からは起き抜けの思考で、五日後には大きな区切りの九十歳になるという手応えを持ち、それからいつものように庭へ出たのであろう。そして淡々とした思いで、穏やかに元旦を迎えたことを寿ぎ、昨日と同じようにご自分の分身とも思える庭の松に「また一年よろしく」とでも声をかけ、朝風呂を気持ち良く終えたのである。

蒼茫集

沖へ注ぐ

辻美奈子

裸木として輪郭を新たにす

* 去年今年源流いまも沖へ注ぐ

鎌鼬遭ひし傷よとのたまへり

しあはせは少しづつ来よ根深汁

白息やことばひとひらづつ開花

流さるる力のこして浮寝鳥

放心

細川洋子

黄落やスコーンさくさくほろほろり

文且の側頭辺り掴みを取り

* 放心のかたちに置かれ皮手套

十二月八日マークシートを塗りつぶす

鎌風や真空パットクめく体

凍蝶へ天使の梯子あまねしや

美しき曲線

辻前富美枝

頑健を少しほめられ大根干す
富士塚も登れば登山紅葉散る
*螺旋とは美しき曲線りんご剥く
直会のあとの赤飯雪もよひ
粛粛と食べて日本語聖夜餐
ポインセチア映画の恋に恋をして

反抗期

町山公孝

*真つ赤なセーター八通路の反抗期
同級生みんな傘方や花八手
花八手さみしがり屋はよく喋り
かいつぶり影も残さぬ潜きやう
冬銀河こぼるるあたりにて遊ぶ
凧は寧めり沖のふところに

原つば

菊川俊朗

凧に押されてくぐる縄のれん
狐鳴く昔話のやうな夜
冬の鴟疾うに贄など忘れては
*紙漉に太初の波のありどころ
原つばにタイムトンネル冬夕焼
しばらくは海に染まらず風花は

裸木

大畑善昭

子が生れむ裸木に日の遍きは
腐葉土に寝かせて大山蓮華の実
*死後新語冬木はほのと光り合ひ
また低く過ぐる白鳥黄の脚も
撥ねつよき扁額の文字枯るる中
寝入るまで白鳥の声耳にあり

潮鳴集

蔵小路 兵藤 惠

* 鮫鱈に海を咬ませて吊しけり
義士の日や影立ち上る蔵小路
枯すすき煙になつてゆくとろ
火を待てる秋葉灯籠初しぐれ
大人だけのトランプゲーム冬銀河

見守りて 川高郷之助

* 小春日や指より眠くなる赤子
五つあれば賑はふ数や帰り化
カレンダー残り二枚に花八手
山茶花の白に暮色の定まらず
見守りてゐるにも力冬木の芽

風配り 和田満水

鉄塔を登る工夫や冬日差
冬落暉にボール蹴り出すノースサイド
相部屋の泊まりもあらん神議り
筆先を囁む霜月の悔み状
* 綿虫の風を配りに行くやうな

鳩の笛 鈴木齊天

* 暮れの秋囁み合はぬことまたひとつ
淡海なるさざれさざ波鳩の笛
雪吊りの松や藩主の屋敷跡
行く川的美濃はしぐれの川燈台
枝折戸の結び目解けぬ霜の朝

最果て 平松うさぎ

冬ざるる水を出でたる鷺の足
天狼の山河あまねく響動もせり
白鳥や細き首折る恋をして
* 凍滝に未だ決心のつかぬ水
鷹の眼の最果てを追ふ風を追ふ

野良の子犬 小形博子

刈田原嘶きはるか駅家跡
電線の唸り遠のく神渡し
* 凧や梵字となりて烏とぶ
断捨離は明日への一步枯木立つ
名を貰ふ野良の子犬やクリスマス

番屋の炉 栗坪和子

* からからの海草をくべ番屋の炉
舟小屋に休漁の權鶴渡る
あはうみの灯台ちさし紅葉鮒
積み上げし本の断面十二月
母ありし頃のゆふぐれ枇杷の花

淋しき鬼 村上葉子

しなやかに我を包めり霧襖
栗の飯淋しき鬼と喰らおうか
* 黄落にひとり佇むあれは母
仏身となるまで揺るる蓑虫よ
枯蟻螂いまだ放さぬ斧二丁

短日 中村重幸

短日や大工の口に残る釘
* 作法よき手に開かるる障子かな
焚かれつつ落葉おのれの声放つ
生きてゐる泥をさぐりて泥鰯掘
白菜の重ねし月日割りにけり

十二月 関根瑤華

富士の峰借景にして懸大根
* ほどく紐括る紐あり十二月
口中に海鼠この一年を噛みしむる
町々にゐた餓鬼大将空つ風
酔ひ醒めの水少しやる室の花

飛鷹選評



能村 研三

風音を落としきつたる枯木かな

坂下 成紘

坂下さんは北陸七尾の方。輪島の海に面した所では「間垣」と呼ばれる、長さ約三メートルのニガ竹を隙間なく並べた垣根が作られ、集落をぐるりと取り囲み、日本海の強風から家屋を守る。海岸に面した樹々も折からの季節風に苛まれて、葉を全て落し裸木となる。「風音を落としきつたる」と音を際立たせながら、その厳しさを詠んでいる。

裸木の並木一本づつ孤独

枇杷木 愛

散策路に並ぶ並木道は四季折々の変化があつて楽しめる。芽吹きの中、新緑や紅葉の季節を経て、やがて裸木となる。並木は一列に仲良く肩を並べているようにも見えるものの、本当は皆孤独なのかも知れない。日常的な景色ではあるが、凜とした樹木そのものの風格がある。

瑟瑟と佐渡を呑み込む鱒起し

里村 梨邨

「瑟瑟」とは、鼓や太鼓の鳴り響くさま、あるいは水や波の音の響くさまを言う。「鱒起し」というと富山の氷見を思い起すが、他でも北陸の沿岸や佐渡などで鱒のくる頃に強風と共に鳴る雷は、漁師には師漁の始まりの合図で

あり、人々には冬の到来を告げる。「瑟瑟」という言葉が、その臨場感を伝えるに適切な言葉である。

秋の空すぼときりんの首嵌まる

浜田はるみ

面白い発想の句である。昔から、俳句が作れなくなったら動物園に行けといわれているほど、動物たちの様々な動きを見ていると思わぬ発見がある。作者は、何度も動物園のきりんと対峙して、独特な角状斑の模様が鮮やかに秋の空の中に嵌っているように見えたのだ。

黒塀の外を窺ふ花八手

福田 肇

黒塀というと赤坂や神楽坂などの高級料亭の立ち並ぶ界隈を思いおこす。一般庶民には敷居の高い所だが、政界などの密談もこういう所で行われているのか。花八手は小さくて細かい黄白色の花を鞠状にたくさんつけていて、まるで外の様子を監視しているようでもある。

待つといふ時間あまやか冬董

吉村 涼子

待つことの余裕など無くなってしまったかのような現代には、こうした作者の気持があると、何かほっとさせてくれるものがある。待つ相手にもよるのだろうが、「あまやか」な時間をくれた相手はきつと素敵な人であったのだろうか。

風花の中に銃口定まりぬ

青木 幹晴

銃口とはいささか穏やかではないが、この句は猟銃の銃口と解釈したい。狙っているのは、雉などの山鳥か、鴨などの水鳥だろうか。風花が舞い散る中、心を集中し、伏せて狙うハンターの眼光炯々たる姿が見えてくる。

沖作品



能村研三選

昨夜欠けし月煌煌と冬の朝

石川

坂下 成紘

* 風音を落とすきつたる枯木かな
回遊は少なき予報鯽起し
発電の風中の屋根に鯽起し
過疎すすむ里に呻吟さまよふ虎落笛

* 裸木の並木一木づつ孤独

静岡

枇杷木 愛

朔日の真闇に一つ星冴ゆる
蝶凍てて天与の翅をほどかざる
ゆるやかに寄せて四温の波がしら
鳴かぬ鴨止めて翳りぬ枯木の秀
* 鑿鑿と佐渡を呑み込む鯽起し
寂庵の破顔一笑かへり花
口応へ下手で雀は蛤に
寒椿ひと傷つけぬ嘘もあり
来し方の色のとりどり柿落葉

千葉

里村 梨邨

* 秋の空すぼときりんの首嵌まる
松手入れ峡の青空すき込みぬ

埼玉

浜田はるみ

混沌の世を淡淡と草の絮
糶田の丈へ天光惜しみなく
野外ジャズ果ててちちろの帰り道
句集「ひとり」残し寂庵冬に入る

市川市

福田 肇

* 黒塀の外を窺ふ花八手
電飾に浮かぶ裸木けやき坂
北風や赤いほつぺの昭和の子
廃車して置場は枯葉の吹き留り
行幸の大路真つ直ぐ冬うらら
* 待つといふ時間あまやか冬菫
宝くじ売場に鉢の実千両
讚美歌のこぼるる学舎帰り花
丈詰めて取り込む鉢や冬構

吉村 涼子